

## 用語・又作ルから見る溝口若狭林卿『紙上蜃気』用語連関の特性

建築デザイン研究室 A98T432 前川歩

### 1. 研究の目的

本研究は、溝口若狭林卿<sup>1</sup>によって宝暦8年（1758）に著された、『紙上蜃気』<sup>2</sup>という日本初の建築辞書を研究対象にする。

同書は、日本初にもかかわらず、『紙上蜃気』という辞書に不似合いな題名や奇妙な扉絵（図1参照）が端的に示すように、安易に近世期の辞書の範疇におさめることができないことに気付く。つまり、ある独特な建築記述（＝把握）の手法が実践されていると考えられるのである。



図1：『紙上蜃気』扉絵



図2：『紙上蜃気』本文

本研究は『紙上蜃気』におけるその手法の紹介・分析に加えその背景をも明らかにすることが目的である。

具体的には、本書の特異性が集約していると考えられる、「又作ル」という語が挿入された項目の分析を行うことで、溝口の手法を明らかにしたい。

### 2 『紙上蜃気』における特異な記述法

『紙上蜃気』の記述形式・用語配列には、通常の辞書ではあまり見受けられない次のような2点の特質が発見できる。

- ・ 原則的に用語に意味が与えられていない点
  - ・ イロハの部であっても第2音以下の配列がイロハ順に沿っていない点（以上図2参照）
- つまり、辞書といえどもその形式は、ほとんど用語の羅列のように見受けられるのである。また序文より、本書の題名には次のような意図が込められていることが確認できる。

- ・ 海上の蜃気楼にちなみ、紙上に建築の要素を挙げて楼台のかたちを示すことを目指す<sup>3</sup>

こうした意図は観念的なものであると考えるのが自然であろうが、仮に実際実践されていると考えるならば、一見不規則のように見える用語の配列には何らかの意味があると考えられるのではないかと。

つまり、それぞれの語は紙上に建築を構築するしか

たで並べられていると。

さて、各用語の間には図2のように「○」が挿入されているのだが、稀に「又作ル」という語が挿入されていることがある。「作ル」という語から、ある構築的な意味合いを連想できるように、先に見た溝口の意図が、「又作ル」を介した用語配列に端的に集約しているのではないのだろうか<sup>4</sup>。

### 3 「又作ル」による用語連関の分析

「又作ル」は伊之部から須之部まで全848項目中、54項目存在している。この中から典型的な事例を3例取り上げ、「又作ル」の前後の用語にどのような連関があるのか分析を行う。

#### ■事例1 「梁作ル柱欄額俗作貫二梁夾又作介鉢巻

これを整理すると、

「梁」→「柱欄額」→「梁夾」→「鉢巻」となる。

- ・ 「梁」：略
- ・ 「柱欄額」：「かしらぬき（頭貫） 柱の上方の繋ぎとなる横木・・・」
- ・ 「梁夾」：「はりばさみ（梁挟） 小屋梁より隣の小屋梁へ掛渡しある木にしてその繋ぎとなるもの・・・」
- ・ 「鉢巻」：「はちまき（鉢巻） 土蔵もしくは箱棟などの軒下において、平壁より突出せる細長き平面をいう・・・」（以上『日本建築事彙』<sup>5</sup>以下、建彙）

さてこれら4つの用語はそれぞれ屋根の小屋組みないしその周辺に使われるものであり、これらの用語連関からある種の図（図3）が浮かびあがる。

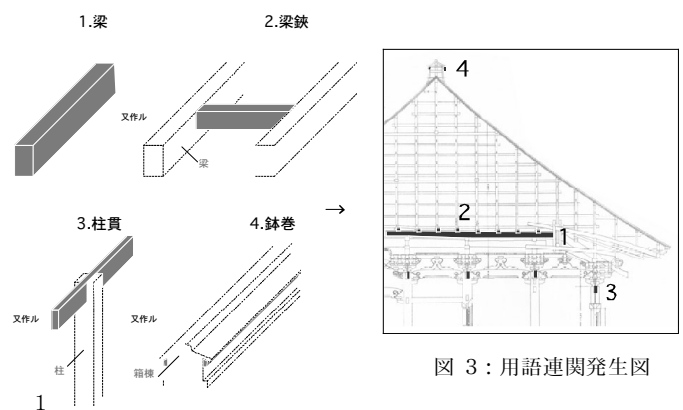


図3：用語連関発生図

#### ■事例2 「裁榑宇榑之字作ル妻二者ノハ非伐接又作ル切接二霧除

つまり、「裁榑宇」→「伐接」→「霧除」となる。

- ・ 「兩下屋」：「切妻屋根（きりづまやね）：屋根形式の一。大棟から両側に流れをもつもの」（建彙）

- ・「伐接」：「切接ぎ（きりつぎ）：切って物と物とをつぎ合わせること。」（『広辞苑』<sup>6</sup>）
- ・「霧除」：「霧除け（きりよけ）：→きりよけびさし霧除け庇（きりよけびさし）：窓や出入り口など開口部の上部に雨仕舞いのために取り付けられた簡単な庇」（『建築大辞典』<sup>7</sup>）

これら3つの用語連関を考えると、「切妻屋根」は概念的に考えると一枚の板を2つに切りそれに角度をもたしつないだものであるという点、「霧除け庇」は元来ないもの、つまり後から付加的に取り付けられるという点で、それらの行為は「切接ぎ」によって説明がつけることができるだろう。（図4参照）

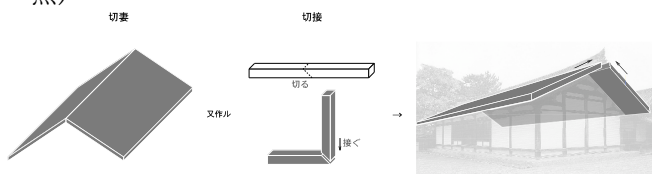


図4：用語連関発生図2

### ■事例3 「發草俗ニ作ルハ雙ニ措出」

つまり、「發草」→「措出」と表現できる。

- ・「發草」：「はっそうかなもの（八双金物） 門扉又は板唐戸などに横に取付けある物・・・」（建築）つまり、門戸の留め具をさす。
- ・「措出」：「はねだし（刎出） 足場板などの端の支えなき部分・・・」（建築）

この2つの用語のつながりは近世の門戸を見れば明らかであり、八双によって支えられた門戸の先端は支えのない状態である。つまりその状態は「はねだし」の状態と考えてよいだろう。（図5参照）

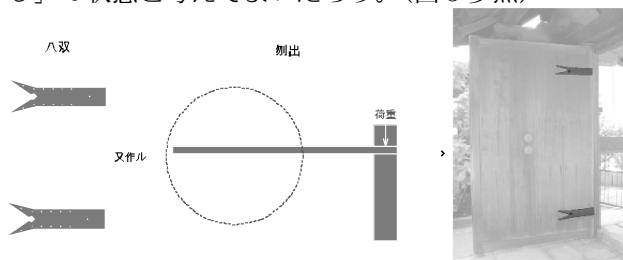


図5：用語連関発生図3

以上より「又作ル」に連なる用語がある連関をもち、その連関からある種の図（＝イメージ）が描けることが明らかになった。また、それぞれの図＝イメージは性質の相違はあるものの、決して単的な言葉によって表現しえない複雑に入り組んだ、匠家に必要な知識が表現されていることがわかった。こうした事例分析より「又作ル」が与える用語連関の性質は

- 1) ある部位周辺の構成（事例1）
- 2) 構法的共通性（事例2）
- 3) 性質、形態の類似（事例3）<sup>8</sup>

に大きく分けることができることが分かった。

また、この図＝イメージが、一般的な辞書においての「意味」にあたるものと考えてよいだろう。

## 4 考察・「紙上に建築を構築する」必要性

次に、「用語の連関によりある種の図を発生させる」という手法を、溝口がどのような必要性から用いたのかを考察してみたいと思う。

建築の術語を言葉で説明することは一般的に考えて難しい。なぜなら、ある用語（部材）がどういった意味（性質）をもつのかは、そのみでは決定できず、常に他の用語（部材）との連関からのみ決定可能だからである<sup>9</sup>。つまり、術語の説明は言葉よりも図のほうが的確である。溝口の特異な手法の要請要因も次のように考えられるのではないのか。

- ・溝口は用語の意味はそれ単体として決定できるものではなく、あくまで他の語とのネットワーク（連関）の中で決定するものであると考えていた
- しかし次のような疑問も生じる。それならばなぜ、溝口は図を用いず、あくまで用語の連関にこだわったのか、と。これに対しては次のような指摘ができるかもしれない。図は、具体的で分かりやすいと同時に、それ故それぞれの部材に対して一面的な決定を行ってしまう。しかし同じ部材であっても建物によって、形や技法が異なることは明白であり、そのような一面的な決定は用語の理解の妨げになることがあり得るだろう。そして、溝口がそうした用語の可変性を許容するために、あえて図を与えることをせず、その図の発生を用語の連関から、読者に委ねていると考えることができるのではないだろうか。

## 5 結論

『紙上蜃気』の特異点—紙上に建築を構築することが、用語に連関をもたすことにより実行されていることが、その性質が集約されている「又作ル」の事例を分析することより明らかになった。またその意図を導くことができた。

<sup>1</sup> 溝口は江戸幕府小普請方大工棟梁・溝口家に属していた人物である

<sup>2</sup> 本書は、約1650項目、約2300語を収録しており、その構成は35部に及ぶ意義分類部と42部のイロハの部とからなる。同書は匠家の一助となることを意図し著され、当時の錯綜した大工の言葉を公定する意図があったと指摘されている。近世期は知識の増大・大衆化に伴い、その体系化が要請され、辞書的な書物が多く出版された時代でもある。このことはある種の近代化の芽生えと言ってよいだろう。そして、本書の執筆要因もそうした時代背景に求めることができるだろう。

<sup>3</sup> 溝口は序文で「凡そ二千三百餘銘、紙上に之を著わし、紙上蜃気と言」と述べている

<sup>4</sup> 「又作ル」は、「彫入又作ル込鑲入」のように使用される。つまり註文部分では「入」の同訓異字である「込」を説明している。しかしそれだけでなく、本書では通常、用語の分節のために、用語間に「○」が挿入されているのだが、ここでは「○」を介することなしに次の用語「鑲入」が連なっていることが確認される（図2参照）。つまり、ここでは2つの用語が分節されていないのである。つまり、前後の用語にはなんらかの連関があると考え得るのである。

<sup>5</sup> 中村達太郎『日本建築辞彙』丸善書店 1918年

<sup>6</sup> 『広辞苑』第五版 岩波書店 1998年

<sup>7</sup> 『建築大辞典』彰国社 1973年

<sup>8</sup> 今回省略した54事例の内訳は以下の通りである。分類1) 13個、分類2) 5個、分類3) 10個、そのほかに、分類4) 「又作ル」で終わる5個、分類5) 連関不明11個、分類6) 用語の意味自体が不明8個。5)、6)の事例を考慮すると、この3つの分類は今後さらに展開可能であると考えられる。

<sup>9</sup> 太田博太郎は「術語というのは、互いに連関があるから、個々に、ばらばらに説明したのでは、かえって理解しにくい。」と指摘している。太田博太郎監修 西和夫『図解 古建築入門』p3 彰国社 1990年